いればをしたロバの話

今西祐行

北島新平／画

今西祐行

いればをしたロバの話

いればをしたロバの話

創作児童文学

初版発行／1971年12月©
第28刷発行／1980年8月

著者／今西祐行

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4—3
電話／東京03—861—1861（代表）
振替／東京0—64678

印刷／（有）加藤印刷
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

909 今西祐行
いればをしたロバの話
今西祐行
金の星社 1980
169P 22cm（創作児童文学）

基本カード記載例

8393—012081—1406

はじめに／今西祐行

これは、動物園でもめずらしいほど長生きをした、あるロバの物語です。名まえは「一文字」といいました。三十一さいでした。

なーんだ、そんなに年よりではないじゃないか。――そうおっしゃるかもしれません。でも、ロバの三十一さいといえば、人間の九十さいいじょうにあたります。世界じゅうでもめずらしい長生きをしたロバです。

さあ、その一文字ロバのお話をきいてください。

■もくじ

1 ベネチアのロバ……6
2 コウリャン畑……14
3 いやな におい……19
4 ふたりの ぐんそう……27
5 ロバどの おとおり……34
6 つなを しゃぶる……45
7 せんじょうへ……51
8 「一文字号」……59
9 なつかしい家……73
10 くるしい行軍……79

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

11 ながれ星……88
12 わかれ……95
13 がいせん……100
14 動物園……111
15 えさくばり……120
16 ぼくらの えんそく……125
17 ゾウさんの さいご……134
18 〝ロバどの〟と くつみがき……144
19 「わたしに もっとえさをください」……155
20 いればを してもらって……159
あとがき……168

装本・挿画／北島新平

＊ 作者の紹介

今西祐行（いまにし すけゆき）

1923年大阪に生まれ，小・中学時代を奈良ですごす。早稲田大学卒業。1956年『そらのひつじかい』で日本児童文学者協会新人賞を受賞したのをはじめ，ＮＨＫ児童文学奨励賞，野間児童文芸賞などを受賞。児童文学の著作多く，主なものに『肥後の石工』『浦上の旅人たち』などがある。　住所＝神奈川県津久井郡藤野町牧野11,980

いればをしたロバの話

今西祐行／作

1
ベネチアのロバ

中国のロコウキョウ――といえば、おとなの人は、すぐに、ああ、あの戦争のはじまった……というにちがいありません。

そうです。日中戦争のはじまったところです。ぼくが生まれたのは、中国の、そのロコウキョウという、川ぞいの小さな町です。戦争がはじまる二年まえのことでした。

ぼくは、いま「一文字」とよばれていますが、ほんとうの名まえは「白」といいます。

なぜ「一文字」だなんて、おかしな名まえがついているのか、それは、あとでお話しましょう。

ロバは、たいてい、はい色をしているものですが、ぼくのはい色は、とても白っぽかったのです。年をとったからではありません。生まれたときから、ぼくはほんとうに白かったのです。

ぼくが生まれて、はじめてあるきだしたとき、しゅじんの家にいた女の子が、ぼくを見ていいました。

「あっ、うさぎだ。白うさぎだよ。うさぎちゃんが生まれたよ。」

そういって、ぼくをおいかけました。

それで、ぼくは「白」って名まえをつけられたのです。

ロコウキョウといっても、日本の人は戦争のことしかしらないようですが、ほんとうは、戦争なんかがはじまるより、ずっとずっとむかしからある、ふるい町です。

町のはずれにある、ロコウキョウという、うつくしい石の橋は、とくにゆうめいです。

七百年もむかし、マルコ・ポーロという人が、とおいヨーロッパの、ベネチアというところから、さばくをこえて、あるいてやってきたときも、この橋をわたったのだということです。

ぼくのしゅじんは、なかなかのものしりで、おもしろい人でした。

ぼくが生まれてまもないころでした。

あるとき、そのころペーピンとよばれていた大きな町から、おきゃくさんがやってきました。

そのおきゃくさんは、白うさぎのようなぼくを見ると、このぼくを、売ってほしいといいだしたのです。

「いくら出す。」

と、しゅじんがききました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「五万円。」

と、そのおきゃくさんは、かた手のゆびをひろげてこたえました。

いいえ、「五万円」だなんて、日本のお金でいったわけではありません。そのころのお金を、なんといったか、ぼくはまだ小さくて、よくおぼえておりません。たぶん、いまでいえば、そのくらいのことをいったのだろうとおもうのです。

すると、しゅじんは、

「おきゃくさま、このロバを五万円で買おうだなんて、そんな、むちゃをおっしゃってはこまります。この『白』は、そのへんをうろついているロバと、ちと、わけがちがうんですよ……。」

「どうちがうのかね。ふつうのロバより、たしかに、ちーと白いようだがね。」

「そうそう、そうですよ。こんなロバは、ちょっと、このあたりでは見

かけないでしょう。そのはずです。このロバは、いまから七百年のむかし……。」

「七百年？　なにが七百年のむかしかね。」

おきゃくさんは、おどろいてききかえしました。

するとしゅじんは、ちょっとはなさきを上にむけて、とくいそうに話しはじめました。

「そう、七百年のむかし、マルコ・ポーロという商人が、とおいとおい、イタリアという国のベネチアの町から、ロバにのってやってきたのでございます。とっとこ、とっとこ、あのロコウキョウをわたって、町にやってきた。このロバは、そのときマルコ・ポーロをのせていたロバの、その子どもの子どもの、子どもの子どもの、ずーっと子どもの子どもなんですよ。つまり、こいつは、ベネチアのロバってわけです。」

おきゃくさんは、マルコ・ポーロといっても、しりません。ベネチア

なんて、そんなヨーロッパの町の名も、もちろんしりません。
でも、しらないなんていうのがくやしいので、
「ふーん、へえーっ……。」
と、かんしんするばかり。そして、ひろげたかた手に、もう一本ゆびをくわえて、
「そんなら、これでどうだろう。」
と、いいだしました。
しゅじんだって、マルコ・ポーロがどういう人で、ベネチアというところが、どんなところかしりません。ただ、だれかにそんな話を、きいて、でたらめをいっているだけです。しゅじんは、ぼくを売ろうだなんて、はじめからかんがえてはいないのです。ただ、からかっているだけです。
「だめです、だめです。おきゃくさん。これでもおしいくらいです。」

そういって、りょう手のゆびを、いっぱいにひろげてみせました。十万円というわけです。

「とてもとても、ロバの子一とうに、そんなお金が出せますかい。」

おきゃくさんは、そういってあきらめました。

でも、このごろ、ふとかんがえることがあるのですよ。もし、あのときに、あのおきゃくさんに売られていたら、ぼくはいまごろ、どうしていただろうとね。ロバの一生なんて、ほんとうに、どんなことで、どうなるか、わかりませんからね。

2 コウリャン畑（ばたけ）

ぼくのしゅじんは、ほんとうにやさしい人でした。ぼくがあるけるようになると、どこへゆくにも、ぼくをつれていってくれました。しゅじんは、ぼくのおかあさんにのって、ぼくはそのおかあさんにつながれて、あとからついていくのです。

そんなとき、しゅじんは、かならずぼくにも、にもつをつけました。ぼくのからだくらいもある、大きなにもつなのです。ところが、それはいつもからっぽのかごで、いかにも大きなにもつをせおっているように

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com